

2. 人材を育てる 科学コミュニケーターの養成

科学コミュニケーターを社会へ輩出するとともに外部人材向けの科学コミュニケーション研修を実施しています。

■科学コミュニケーターの輩出

日本科学未来館の科学コミュニケーターは最長5年の任期制職員として採用され、展示フロアでの解説やイベント、展示の企画などの科学コミュニケーション活動を実践しています。任期終了後は科学コミュニケーションの経験をもつ人材として、研究機関や大学、科学館・博物館、企業、教育機関などで活動します。2016年度は14名の科学コミュニケーターを輩出しました。

2016年度の輩出先

輩出先の業種	研究機関・大学等	企業等	その他	計
人数	8名	3名	3名	14名

▶長期派遣教員の受け入れ

現職教員が科学コミュニケーターとして日本科学未来館の活動に携わることで、科学コミュニケーション活動のノウハウやスキルを学び、学校教育現場へ還元することを目的として、1名の長期派遣教員を受け入れ、展示解説、実験教室の講師、イベントの企画・運営、記事執筆等の業務を通じた研修を実施しました。

期 間：2016年4月1日(金)～2017年3月31日(金)

派遣元：埼玉県立特別支援学校さいたま桜高等学校

2. 人材を育てる 日本科学未来館の科学コミュニケーター(2016年度)

日本科学未来館での科学コミュニケーション活動を通して、科学技術と社会をつなぐ役割を果たしています。2016年度に活動した科学コミュニケーターを紹介します。



雨宮 崇

「地球温暖化は俺が解決する!」という熱い想いを胸に、大学院では省エネのための材料研究に没頭。院修了後、理科の面白さを子どもに伝えるためのデジタル教材を開発。日本科学未来館で最先端科学に触れたい・伝えたい!



石田茉莉奈

好きなものは「生物」と「コミュニケーション」。ところが、大学で生物の研究者には向いていないと挫折。コミュニケーションを極めようとシステムエンジニアとしてお客様にシステムを提案する日々を送る。しかし、生物への愛は忘れられず、「生物」と「コミュニケーション」の組み合わせにチャレンジしたい!と思い日本科学未来館へ。



伊藤健太郎

研究者を目指し大学院で研究をしていたが、大学院在籍中に突如、青年海外協力隊として西アフリカのベナンへ赴く。その時の経験から社会と研究成果を結びつけることに興味をもつ。学位を取得した後、研究員として放射線測定などに従事し、日本科学未来館へ。



入川暁之

小学生のときに瀬戸内海で遊んだことがきっかけで海洋生物学の道に。その後、マグロ漁船乗組員や潜水士をしながら貯めたお金で大学へ。沖縄の海でサンゴの研究をすることに。そこで生物多様性の大切さに目覚め、現在は研究活動を続けながら科学コミュニケーションに精進。特技は素潜り。



榎戸三智子

子どものころ、空を眺めては宇宙のナゾに思いを馳せる。大学時代に出会った量子の世界に心ひかれ、素粒子物理学を研究(理学修士)。たくさんの人、特に子どもが科学をもっと楽しむ日本にしたい!



小幡哲史

演奏者はどうやって楽器を演奏しているのだろう。演奏者にとって当たり前で自然なことも、科学の目を通して見てみると、演奏者自身も意識していないようなさまざまな発見がありました。演奏者と科学をつなぐ存在になりたいという思いが、人と科学をつなぐ存在になりたいという思いとつながり日本科学未来館へ。



梶井宏樹

人と話す時間よりも分子と話す時間の方が長かった研究室時代に、夢が出来ました。「化学と人を繋ぐ!」こと。そんな時に科学コミュニケーターという生き方を知り、「一度社会に出て、現場を知った後にやろう」と決意。リスクコミュニケーションも大事ですが、楽しい化学コミュニケーションを目指しています。



片平圭貴

大学で出会った「鉄」。100トンの鉄を成分0.1%以下の精度でコントロールする、繊細かつダイナミックな現代の錬金術を追及してきました。こんなに面白いこと、みんなにぜひ紹介したい!でも、実はみんなも面白いこと、たくさん持っているんじゃないの?そんな話をいろんな人としたくて日本科学未来館へ。



小熊みどり

子どもの頃から宇宙が好きだったが、なぜか学部では温泉の研究をする。好奇心旺盛すぎて大学を飛び出し金融業界へ。一周回って、その後大学院でやっと宇宙の研究を始める。宇宙ミュージアムTeNQ等研究室での展示活動に関わったことで、科学コミュニケーションを本格的にやってみたいと思い日本科学未来館へ。



金城文乃

火山噴火のテレビ中継に釘付けになっていた幼児期、プレートテクトニクスに衝撃を受けた小学生時代を経て、受験科目としての暗記や対策ばかりの理科に満足出来ず、大学院まで地質学にのめり込み、そのまま石油開発業界へ。2011年の東日本大震災を期に、研究職を離れて科学と自分のあり方、生き方と向き合うため、外資系電機メーカー等を経て、2015年より日本科学未来館へ。



熊谷香菜子

少女時代の友達はアリとカエル。大学1年で、ウミウシと運命の出会いを果たす。ウミウシを探ったり飼ったり解剖したりして修士号を取得。学生時代に、博物館ボランティアと小学校理科の助手を経験。小学生向け塾から2012年10月に日本科学未来館へ。博物館を、もっと身近で、だれもが学べる会場にしたい。日本科学未来館での友達はユノハナガコと乾眼中のクマムシ。



コドブロス・ディミトリス

ギリシャから来ました。「どうして日本に来たの?」とよく聞かれます。小さいころから「日本に行きたい!」とずっと言っていました。日本の美学とわびさびに夢中になったからです。来日し、天文学を研究しました(天文学修士)。日本科学未来館では、科学は芸術とどうやって繋がっているかをもっと探求したいです。日本語、英語、ギリシャ語のいずれかで話しかけてください!



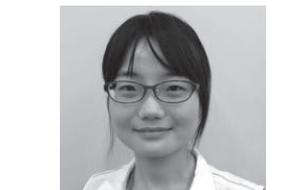
佐竹 渉

幼少の頃から宇宙に興味を持つ。大学で東南アジアにある遺跡の石材の研究をするも、石で宇宙を対象にできると知り、隕石に研究テーマを転向。大学院で博士を取るかわら、JAXA(宇宙航空研究開発機構)で「はやぶさ」の持ち帰ったサンプルの初期分析を手伝う。



志水正敏

生物学の研究者になるべく、熊本から上京。しかし研究室にじっとしてられず、東京のまちをふらふらと。この社会のために、科学を学んだ自分は何ができるのだろうか?その答えが日本科学未来館でした。放浪癖を「フットワークの軽さ」と捉え、科学と社会をつなぐ!



沈 晨晨

地球環境に関心があり、大学で環境科学を勉強しました。大学を卒業してから日本で留学した時海にいるプランクトンの世界を探求しました。研究すればするほど地球環境や生物多様性などの重要性がわかりました。従って多くの人々が環境に関心を持ってもらうように科学コミュニケーション能力が不可欠だと認識しましたので、2014年10月より日本科学未来館へ。



徐 大強

中国・ハルビン市の出身。大学院修了後、1年間小学校に勤め2014年4月より日本科学未来館へ。もともと理科教育に関心をもっていたため、日本科学未来館で自身の科学コミュニケーション能力の向上を追求していきたい。



鈴木啓子

大学院在学中に科学コミュニケーションにはまり、博士号取得後2012年4月より現職。専門は神経科学。研究対象がヒヨコだったのが高じて、鳥全般が好き。科学と未来についてお客様とゆるく語り合っていきたい。



鈴木 毅

大学では、面白そう・あまり難しくなさそうという理由から化学を選択。そして「これからの時代は新エネルギーだ!」という天啓から太陽電池の研究室に進み、博士号を取得。その後一年半ボストクをし、「もっと色々な人が科学に興味をもち研究者になって欲しい。そのためにはどうすればよいか」と考え日本科学未来館へ。



高知尾理

宇宙では既知の元素や素粒子だけでは説明できない現象が観測されています。これを説明する「暗黒物質」の探索実験XMASSに携わっていました。以前から、「伝える」ということに関心があったことに加え、東日本大震災以降、科学コミュニケーションに強く関心をもったため日本科学未来館へ。



高橋明子

子どものころから生き物が好きで研究に没頭し、色々な場所で色々な対象相手に研究をしていました。前職では宮崎県の幸島でニホンザルを追いかけしていましたが、社会の中で研究はどうあるべきなのかを考えるため、2016年4月より日本科学未来館で勤務しています。



高橋麻美

学生時代の半分は海で過ごした。海と生物大好き海人(うみんちゅ)科学コミュニケーター! 不思議なことに、大好きな海を遊ばせてくれた物理も化学も地学にも興味湧いてきた!? この経験を生かして、最近では海だけでなく色々な「科学の見た」を模索中! 大学では環境問題の一つ「海洋酸性化」と「サンゴ」をテーマにサンゴの飼育実験や無人島での調査を行い修士号取得。



瀧戸彩花

人と音楽、人との関係について、音楽を通してひも解くといった試みを行っています。大学ではピアノを弾いたり歌ったりしていました。今の音楽業界の現状に危機感を覚え、途中からコースを変更。思い切って大学を変え、大学院から異文化コミュニケーション学の道に、修士課程から博士課程に進学後は、「音楽」の根源的な問いに目を向け、模倣の文化について調査してきました。その中で、IoTに関心を持ち、音楽と科学のあり方を世に問いたいと考え日本科学未来館へ。



武田真梨子

魔女になりたい! と思いつきながらその辺の草や生き物と戯れていた子ども時代。高校では生物学が一番好きな科目でした。大学に入ってから環境科学を専攻。その後、高校理科教諭、研究所アシスタントの経験を経て、2014年から日本科学未来館へ。



田中 健

大好きな故郷の環境を守りたいと思いつき、地元県庁に入庁。環境問題への取り組みを通じ、地球の未来について、科学的な視点からより多くの人と一緒に考えていきたいと思うようになり、日本科学未来館へ。趣味は、歌うこと、旅行。世界の美しい自然をまだまだ見たい! 世界遺産もたくさん見たい!



谷 明洋

好奇心のままに、地域を伝える新聞記者から、科学を伝える科学コミュニケーターへ。天文少年、アジア横断旅行、熱帯林調査などで膨らませてきた興味と遊び心は、2013年の日本科学未来館入り以降、より幅広く、深くになりました。「伝える」経験と合わせて、ひとりの人間として何ができるのか。人に会い、場を訪ねながら、探求しています。



趙 懐亮

偶然な理由で高校卒業してから日本へ留学することに決定。そしてまた偶然な理由で仙台で11年間も住んでいた。一人にして二生を経る。日本にまた来たお陰で、人生が充実している。もちろん「楽ありや苦もあるさ!」これから三生、四生を繰り返したい。2016年4月より日本科学未来館へ。



田村真理子

フラーレンに夢と希望を感じ有機化学を専攻。修士課程修了後、高校教師を経て2012年4月より現職。科学コミュニケーションを通じて、多くの方々との対話をするなかで日々自分自身も成長したい。文系・理系問わず興味を持ったものは徹底的に調べ、何事も恐れずにまっすぐやる! 歳をとっても、好奇心を忘れずに生きていきたい。



陳 ドウ

出身地は中国の北京。高校を卒業後、日本へ。東京工業大学で触媒化学を学ぶ。ロンドンサイエンスミュージアムなどでインターンシップを経験した後、科学をやるより語るほうが自分には合うと感じ、科学コミュニケーションの世界へ。ロンドンのトレンド的な科学展示から感銘を受け、科学をオシャレに伝える方法を探索中。



坪井淳子

高校で地理の面白さに目覚めて、大学では地学を専攻。その後、自然科学を仕事にしたいと民間気象会社で勤務。自然科学の美しさとそのサービスを形にして社会に届けられることに、やりがいを感じながらも、より広い視野で自然現象と共存するために、私たちはどうあるべきかを考えるため日本科学未来館へ。



戸坂明日香

子どものころから絵を描いたりものを作ることが大好きで、美術の一本道を歩んできました。大学4年の時、彫刻を作るためのモチベーションに科学博物館へ足を運んだのがきっかけで、科学に興味を持つようになりました。想像と創造を求めて日本科学未来館へ。



新山加菜美

高校生の頃、科学番組(不思議現象を解明する!)を見て、研究者になることを決意。大学院修了後、診断薬メーカーで製品の研究開発に携わる。科学実験の“考える”楽しさを伝えたいと思い、日本科学未来館へ。



西岡真由美

「人・動物・自然の調和を未来につなぐ」ことが人生のテーマ。小動物の臨床医として勤務後、人と自然の結びつきに働きかけるには、科学社会と向き合う必要があると考え、科学コミュニケーターの道へ。



野副 晋

大学院修了と前後して青森県六ヶ所村の研究所に就職。このときのプロジェクトが日本科学未来館で取り上げられたときから日本科学未来館の科学コミュニケーターに興味を持つ。その後、別の研究所での勤務を経て、より一般の人と近い距離で科学の話をしたいと思い、2011年10月より日本科学未来館に。メカ好き、のりも大好きな二児のパパ。



長谷川麻子

理系一家に育ったロシア文学専攻(現代詩)、日本科学未来館が開館した2001年夏まで一年間モスクワに暮らす。帰国直後、米国で同時多発テロが起きた。それから10年。外務省勤務やロシア語の通訳翻訳業を経て、2011年から科学コミュニケーターに。アプローチャこそ違え、真理を見極めたいという思いは文系も同じはず。Geo-Cosmosの美しさにパワーをもらいながら、日々新たな気持ちで学び、驚きや喜びをていねいに言葉にしていきたい。



濱五十鈴

事故や病気のために手足の不自由になった人の治療を目指して、再生医療の研究に6年間携わり、博士号(医学)を取得。2012年春より未来館へ。科学のお話を通じて多くの人を笑顔にしたいと思い、科学コミュニケーターになりました。目指せ! 人類70億、総笑顔!!



浜口友加里

子どもの頃の夢は、「歌って踊れる精神科医!」でもお医者さんにはなれませんでした。それでも、人のことについて知りたくて、学部で心理学、大学院で神経科学を学びました。医薬品の臨床開発職、百貨店での化粧品販売員などをを経て、サイエンスもおしゃべりも好きな自分になりました。気づき、その両方を仕事にしたいと未来館へ。



ハミダニハミド

美しい星空のアルジェリアに生まれて育ちました。子どもの時から、天文学に情熱を持っていました。その情熱で学校の長い授業時間を楽しく感じました。学院に入学し、天文学への冒険を始めました。天文学のアウトリーチの楽しさにも出会うきっかけにもなりました。



眞木まどか

気象予報士にもなりたいたし、英語教師にもなりたいたと思う中学時代。最終的に教育の道を選んだが、学校で行われる教育に疑問を感じていた。ちょうどその頃、博物館で行われる教育的な活動に関わったことが契機となり、大学院進学を決意。進学と同時にNPO法人にて社会課題解決型ビジネスを開発する仕事にも従事。2016年4月より未来館へ。



樋江井哲郎

"文系あがりの、なんちゃって理系"大学で経済学を勉強していたが、体内時計の特集番組がきっかけで、科学に興味を持つ。普通は興味の段階でとまるところを、躊躇もせずに理系の大学院へ進学。研究者を志すが、後に研究には向いていないと挫折。ただ科学好きはおさえられず、未来館へ。



福井智一

大学で研究員としてショウジョウバエと戯れるも、野生の世界への憧れを捨てられず青年海外協力隊としてアフリカ・ケニアで野生生物保護活動に従事。帰国後はケニアで撮影した写真をもとに個展などを行う。紆余曲折の後、無節操な知識欲と経験を活かすために未来館へ。



古澤輝由

大学院修了後、高校で生物の教員をしつつ、科学と芸術をつなぐワークショップの企画・運営に関わる。その後、青年海外協力隊としてアフリカ、マラウイ共和国で2年半、理科教育を。節操のないことが取り柄と信じ、まとまりのない経験をまとめて活かすため、未来館へ。



ヘイチク・パヴェル

チェコ出身。中学校の頃から宇宙の誕生やブラックホールなど、狭い地球の枠を超えるトピックに興味をもち、大学で物理と数学を専門にした。卒業後社会に出て、社会と科学の深い繋がり気付き、その共生についてもっと知りたいと思い未来館へ。



本田ともみ

「環境問題とよりよい福祉は両立できるの?」そんな疑問から一番ミクロな実践として「園芸療法」を研究してきた7年間。人がワクワクする場、変化する瞬間を見るのが生きがい。チェロと宮沢賢治をこよなく愛する。人と人が生み出す化学変化を、地球の未来にいかせる科学コミュニケーターを目指します!



松浦麻子

大学院のころ、科学コミュニケーションに興味を持つ。研究者が科学コミュニケーターになったかったが、「一度、社会に出たほうがいい」と恩師に言われ、就職。原子力安全に関わる業務に従事。東日本大震災を機に、科学技術の裏と表の両方を伝えられる人になりたいと、満を持して2013年10月から未来館へ。



宗像恵太

都内中学校の教員として、科学的思考力につながる授業を模索しながら、生徒と理科の授業を日々重ねる。そんな中、「もっと先端科学技術についても一緒に考えたい」、「毎日の理科の授業を科学コミュニケーションの場にした」という思いから、その手法を探りに未来館へ。お客さんと先端科学を交えた対話をしながら、自分も成長していきたい。



毛利亮子

子連れアメリカ留学で多種多様な価値観に触れ、コミュニケーションの重要性を痛感。東日本大震災をきっかけに、私が社会のためにできること・したいことは何かを考え始めました。自らのバックグラウンドを生かしつつ、子ども達に明るい未来を残す方法を模索するため未来館へ。



山内俊幸

子どもの頃から宇宙が好きで研究の道を目指すも、大学生の頃にコミュニケーションの重要性と視覚的なアプローチの可能性に気づき、グラフィックやプレゼンのデザインを独学。研究しつつデザイナーとしても活動を展開していた。言葉としても視覚としても「伝わる」ことの本質とは何かを突き詰めるべく、2016年より未来館へ。



山本朋範

物心つく前は「抱き上げるときには気が抜けなかった」とは親の談。さすがに今は不思議だからって人の目を突ついたりしませんが、サンショウウオを研究したり、フィリピンの田舎に住み着いたり。相変わらず好奇心で生きています。今度は皆さんの好奇心を突つく仕事をしたいと、2016年に未来館にやってきました。



渡邊吉康

幼少時に個性豊かな惑星の画像に魅せられたことをきっかけに、惑星科学の道に。学部では地質・鉱物・地理、大学院では地球物理・天文と色々な分野に手を出してみる。博士課程在籍中にサイエンスカフェの運営に携わり、科学コミュニケーションの面白さや大切さを認識する。複数のバックグラウンドを活かすために、そして様々な立場の人を科学でつなぐ方法を探るために2016年4月より未来館へ。



池辺 靖

科学コミュニケーション専門主任
博士(理学)。宇宙物理の分野において日独米の研究機関で9年半ほど研究に従事したあと、2004年より未来館勤務。本質を語る科学コミュニケーションで、日本再生を目指します。



小澤 淳

科学コミュニケーション専門主任
科学技術系シンクタンクを経て現職。専門はコンピュータ・グラフィック。前職では、情報技術を使った近未来社会の予測や、科学技術と文化芸術の融合領域における政策研究などをおこなった。未来館では情報科学技術分野の展示企画を担当。



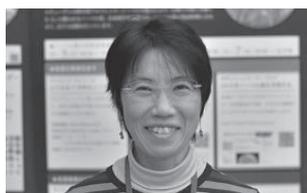
松岡 均

科学コミュニケーション専門主任
理学博士。専門は宇宙物理学。大学院修了後、国内外での研究生生活を経て、2004年に未来館へ。その後、JAXA宇宙教育センターで学校教育の支援活動に従事し、2012年に再び未来館に戻り現職に就く。さまざまな経験を活かし、社会と研究者の橋渡しをしたいと思っている。



森田由子

科学コミュニケーション専門主任
博士(理学)。専門は生物学(動物学)。大学と製薬会社で、基礎科学と応用科学のそれぞれの立場を経験したことが、現在のモノ・コトの考え方に大きな影響を与えた...と思っている。2012年より現職。科学コミュニケーションマインドをより多くの人々が持つようになるためのしゅみを、考え続けている。



詫摩雅子

科学コミュニケーション専門主任
理学修士。植物生態学を学んだ後、全国紙の科学技術部記者、一般向けの総合科学雑誌の記者・編集者として生物学や生命科学を担当。2011年に未来館に。新しい医療技術やバイオテクノロジーが、ときに過剰な期待や不安をもたらしてしまうことを何とかしたいと考えている。



藪本晶子

科学コミュニケーション専門主任
文学部卒業後、教育教材、雑誌、書籍などの編集に従事。日本科学未来館では紙やウェブなどの媒体制作のほか、展示に関する情報編集などを担当。